

令和2年9月18日

## 令和元年度 特別の教育課程の実施状況等について

和歌山県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
串本町立橋杭小学校	串本町教育委員会	公立

## 1. 特別の教育課程を編成・実施している学校及び自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学 校 名	自己評価及び学校関係者評価結果の公表
串本町立橋杭小学校	別添 自己評価・学校関係者評価結果（10/1 公開予定）

## 2. 特別の教育課程の内容

## (1) 特別の教育課程の概要

第1学年…生活科、特別活動の時間から年間34時間を「たていわ」【海洋教育】に替える。

第2学年…生活科、特別活動の時間から年間35時間を「たていわ」【海洋教育】に替える。

第3学年～第6学年…総合的な学習の時間、特別活動から年間35時間を「たていわ」【海洋教育】に替える。

以下のことを取組の柱として、全学年で取り組む。

## 1. 「海とともに生きる」

- ・身近な海について体験活動を通して学び、主体的に関わることができる児童を育成する。(海に親しみ、海を知る)
- ・海との関わりという視点から、先人の歩んだ歴史や残した文化を学び、串本町の自然や資源を生活と関連づけて考えるとともに、海洋環境の保全について自分の考えを持ち、海洋と人類の共生に貢献できる児童を育成する。(海を利用し、海を守る)

## 2. 「防災教育」

- ・地震が引き起こす大きな揺れや津波から身を守るため、状況に応じて主体的に判断し、適切な避難行動をとることができる児童を育成する。(海から身を守る) ※和歌山県防災教育指導に則り実施する。

## (2) 学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

和歌山県は、広く太平洋、紀伊水道に面し、古来より人々の生活は「海」と深く関わりをもち、海から多大な恩恵を受けてきた。海洋と和歌山県人の共生は古来より綿々と続いてきており、「海」には、自然や産業、歴史、文化等の様々な教育資源が豊富にある。本校は、本州最南端、和歌山県串本町の海岸部に立地している。天下の絶景、橋杭岩（吉野熊野国立公園に属し、海岸から大島に向かって大小約40の岩が一行におよそ850mもの長さにもわたり、連続して立つ。）と向かい合って海に建つ学校として知られていたが、東日本大震災以降、津波に対する備えが最も必要な学校として、さらに知られるよ

うになった。自然豊かな地域での暮らしの中で、この「海」に親しむと同時に、「海」をより理解し、積極的に関わる学習を通して、自然災害への備えをしつつ、“危険な海”と恐れるだけでなく、“海のめぐみ”や“海のよさ”を知り、海とともにこの地でより良く暮らしていくことの大切さを学び、生きていこうとする子どもを育てるため、ふるさと教育の一環として海洋教育を位置づけ、その充実を図っていく必要があると考えた。

(3) 特例の適用開始日

平成26年4月1日

平成27年4月1日変更

(4) 取組の期間

令和元年3月31日まで

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

・計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 実施状況に関する特記事項

※(1)で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

(3) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

・実施している

・実施していない

<特記事項>

・学校だより等で保護者及び地域住民に児童の様子を紹介している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

本校の教育目標は、『進んで学習する子』、『思いやり助け合える子』、『心身ともに健康な子』の育成である。本特例は、自然や産業、歴史、文化等の様々な教育資源が豊富にある、本校児童の身近な地域の「海」に親しむと同時に、「海」をより理解し、積極的に関わる学習を通して、海洋環境の保全を図ることができる人材の育成を目指すものである。

本特例に取り組む以前は、目の前に豊かな「海」があるにもかかわらず、「危険さ」の

みに目が行き、海に親しむことはできていない状態があった。しかし、海洋教育に取り組む中で、海に目を向ける児童が増えていった。生き物の名前を覚えたり、海産物の収穫に興味をもったり、台風が近づけば海の様子を窓から眺めていたり、海の多様な豊かさや海の変化について、児童自らが求めて知ろうとする様子が、学年を問わず多く見られるようになっていった。

また、串本町は、海に支えられている町だということについても、町の探検やいろいろな施設見学等を通して、学年段階に応じて学ぶことができた。シュノーケリング体験等、学年段階に応じた体験活動を積み重ねる中で、串本の海の美しさ、生き物の多さ等を知ることができた。

海洋教育がカリキュラムにあるおかげで、それぞれの学年段階の児童が、教科学習等において、実感を伴った理解を得られることがあったことは、成果として挙げられる。

また、郷土の良さを知り、誇りに思う気持ちを育むことにもつながり、児童の情操を養うことにもつながった。さらに、「海から身を守る」防災教育については、県の防災教育指導方針に則り、各学年の成長段階に合わせたカリキュラムで取り組み、防災に係る知識・技能両面の力が児童に定着しつつある。防災教育の授業は、二学期の授業参観で、保護者に見てもらい、ささやかではあるが、地域への防災意識啓発の一助にもなったといえる。

一方で、課題として挙げられるのは、カリキュラムの性質上、体験型の学習が多く、学習の振り返りを発表したり感想を書いたりまとめたりする活動等を行ったが、そのことがすぐに学力向上につながったとは言いきれないことである。

「海に親しみ、海を知る」「海を利用し、海を守る」の部分では、カリキュラムにおける学力向上につながるための仕組みは充分であったとは言えない。

## (2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

「たていわタイム」では、郷土に誇りをもち、さまざまな状況において主体的に判断・行動し、自立した社会人として生きていくことができる力を総合的に育むことをねらいとしている。「海を知り、海と関わる中で自らの役割や責任を考え、ふるさとを支える担い手になること」「命やものの大切さと人の絆の大切さを受け止め、人としての在り方や自らの生き方を考えみつめること」、といった「生き方」の基礎を学ぼうとする姿勢を育てることができた。

## 5. 課題の改善のための取組の方向性

4に示すような課題を踏まえて、体験活動と言語活動のバランスの取り方、児童がさらに学習を進めていきたくなる動機付けに繋がる学習活動の組み立て等が必要であると考えられる。「海」からさらにテーマを絞り、例えば「橋杭岩」について、各学年段階に応じたカリキュラムを作っていくこと等が考えられる。カリキュラム実施にあたっては、PDCAサイクルに、児童からの発信（保護者や地域からの評価が得られる）を必ず盛り込み、本特例の改善を図ることが考えられる。